

## 位置と環境

佐多町は大隅半島の最南端の町で、岬の先端部は東シナ海と大隅海峡に大きく突き出している。そのため、海岸線は激しく浸食され、至る所で人を近づけない急峻な景観を見ることができる。

貝塚のある大泊湾は大隅海峡に面し、沿岸漁業の基地として大切な役割を果たしている。湾奥から貝塚のある南側にかけて砂丘が発達し、その一角に貝塚が形成されている。

## 調査の経緯

昭和28年（1953年）国分直一が発掘調査を行い、縄文時代後期の貝塚として知られていた。その後、昭和57年（1982年）に県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査で、現状の確認を行っている。その際、集団墓地造成工事により遺物包含層が一部露呈していることが判明した。その結果、貝塚を伴う遺跡は外之浦を結ぶ県道に沿い、南側の砂丘、北は大泊集落の後背地まで広範囲に及んでいる。

## 遺構と遺物

遺物包含層が露呈し散乱した遺物を採取しただけで、遺構等については把握できていない。

遺物は、縄文時代後期を主体に縄文時代中期の土器が少量含まれ、16類に分類されさらに、円盤形土製品と底部も見られる。それらを列挙すると、縄文時代中期（春日式土器）

縄文時代後期（指宿式土器・市来式土器・草野式土器・西平式土器）などである。

## 特徴

元来、鹿児島湾岸沿いに貝塚が発達することは少なく、本貝塚以外は垂水市柊原貝塚、鹿児島市草野貝塚、桜島町武貝塚が知られているだけであり、本貝塚もその一環である。また、それらは全て縄文時代後期に限られることから、当時の生活を知る上で本貝塚の果たす役割は大きい。

土器で注目されるのが指宿式土器で、そのほとんどが指宿地方で生産されたものを使用していることである。したがって、鹿児島湾を越えて運び込まれたと考えられる。

## 資料の所在

採取した遺物は、県立埋蔵文化財センターに保管



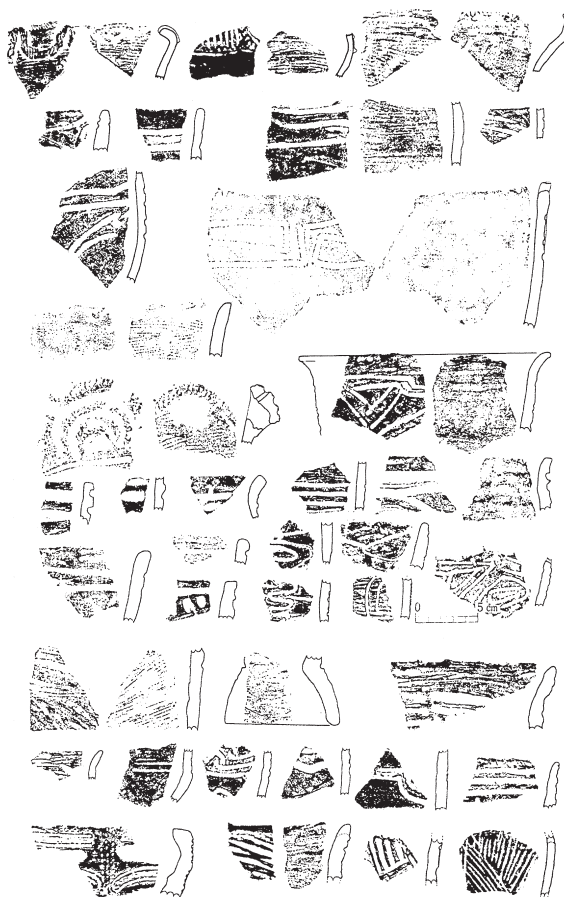
第1図 大泊貝塚の位置

されている。

## 参考文献

国分直一1963「鹿児島県肝属郡佐多町大泊遺跡」『日本考古学年報』6 日本考古学協会纂  
鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』25

(長野眞一)



第2図 出土遺物



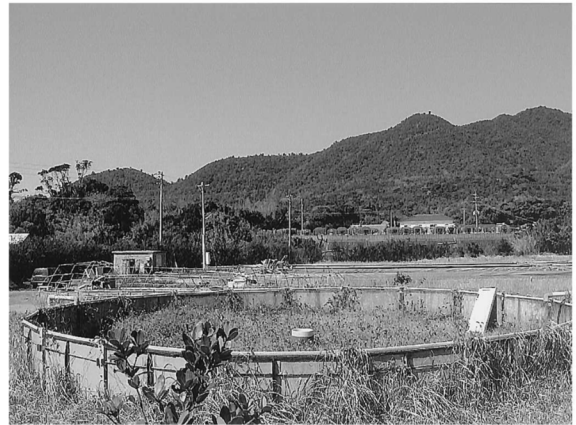
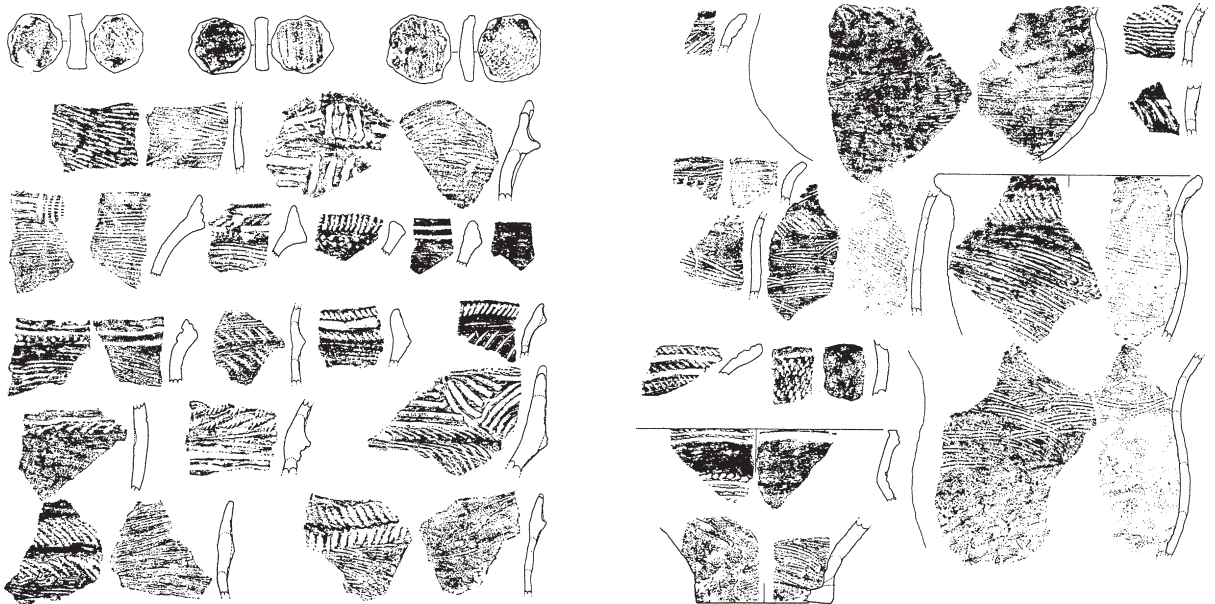


写真1 遺跡現況



第3図 出土遺物